

# 博士學位論文

論文の要旨および審査結果の要旨



2016年3月

人間総合科学大学

## — 目次 —

介護施設入所高齢者の主観的幸福感とその関連要因

Subjective well-being of elderly residents of care facilities and factors related to well-being

・・・ 川井 文子 ・・・ 1

慢性腰痛の表面筋電図の特徴と心理社会的要因の関係 —表面筋電図の筋活動パターンを中心に—

The characteristics of surface electromyograms for chronic back pain and its relations to psycho-sociological factors -With a focus on muscular activity patterns for surface electromyograms-

・・・ 粕谷 大智 ・・・ 2

氏名	川井 文子		
学位の種類	博士 (心身健康科学)	証書番号	甲第 30 号
学位授与年月日	平成 28 年 3 月 20 日	学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	介護施設入所高齢者の主観的幸福感とその関連要因		
研究指導教員	教授 鈴木 はる江		
論文審査委員	主査 丸井 英二	副査 吉田 浩子	副査 大東 俊一 副査 中野 博子

## 博士学位論文内容の要旨

### 【目的】

介護施設に入所している日本人高齢者の主観的幸福感とその関連要因を明らかにすることを目的とした。

### 【方法】

地方都市の介護老人福祉施設 4 施設および介護老人保健施設 3 施設の入所者のうち、選定基準に達し同意が得られた高齢者 128 名を対象として、2013 年 6 月から同年 8 月に構造的面接による聞き取り調査を行なった。調査内容は基本属性、施設内生活状況、四季折々の行事、最期の場の希望、健康度自己評価、超越的なものへの関心、主観的幸福感尺度の改定 PGC モラール・スケール(日本語版)である。PGC モラール・スケール値を目的変数、他の調査項目を説明変数として重回帰分析を行った。またアンケート中に自発的発言のあった高齢者 63 名の言葉を質的に分析した。

### 【結果】

介護老人福祉施設と介護老人保健施設に入所する対象者の年齢、介護度、入所年数、PGC モラール・スケール値には有意な差がみられなかった。また、対象者の年齢は 65 歳から 104 歳で、平均  $84.8 \pm 7.7$  歳、介護度の平均は  $2.58 \pm 1.2$ 、PGC モラール・スケール値の平均は  $11.8 \pm 3.9$  であった。主観的幸福感(PGC モラール・スケール値)と全変数間の重回帰分析により、「健康度自己評価」と「自然とのつながり感」は有意に主観的幸福感を高め、「自分と先祖・子孫との結びつき感」は有意に主観的幸福感を低下させる要因であることが示された。さらに自発的発言の分析では、発言が肯定的と判定された対象者の主観的幸福感に発言が否定的と判定された対象者の主観的幸福感に比べ高い傾向にあった。

### 【考察】

介護施設入所高齢者の主観的幸福感に最も影響を及ぼしている要因は、これまでの地域在住高齢者の研究結果と同様に「健康度自己評価」であることが明らかとなった。また、「自然とのつながり感」も施設入所高齢者の主観的幸福感を高めていたが、これは日本人の自然観によるものと考えられる。他方で、「自分と先祖・子孫との繋がり感」は家族との繋がり感の低さに通じ、施設入所高齢者の主観的幸福感を低下させることが推測された。また、高齢者は「諦観」することで非可逆的な身体機能の喪失の中から選択的に目標や情動調整を行い、否定的感情を抑制して肯定的感情を維持し、発達変容していることが示唆された。

### 【結論】

介護施設入所高齢者の主観的幸福感に対して、「健康度自己評価」と「自然とのつながり感」は正の要因として、「自分と先祖・子孫とのつながり感」は負の要因として影響を及ぼしていることが明らかになった。

倫理審査申請承認機関：人間総合科学大学 (第 350 号)

## 博士学位論文審査結果の要旨

平成 28 年 1 月 27 日、論文審査委員が一堂に会した場で本論文に関する口頭試問を実施し、申請者に論文内容の発表ならびに関連事項の質問に対する応答を求めた。発表では、介護施設入所高齢者の主観的幸福感に最も影響を及ぼしている要因は地域在住高齢者の研究結果と同様に「健康度自己評価」であること、高齢者は非可逆的な身体機能の喪失の中から選択的に目標や情動調整を行い発達変容していることを述べた。その結果、論文審査委員は本研究が心身健康科学の分野に貢献し独創性のある内容であることを認め、申請者が博士(心身健康科学)の学位を受けるに十分な資格を有するとして審査の結果を合格と判定した。あわせて、口頭試問では本論文に関する専門知識を問う質問についての確かな応答が得られたことから、申請者は今後自立して研究を行うことができると判断した。

氏名	粕谷 大智		
学位の種類	博士 (心身健康科学)	証書番号	甲第 31 号
学位授与年月日	平成 28 年 3 月 20 日	学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	慢性腰痛の表面筋電図の特徴と心理社会的要因の関係 —表面筋電図の筋活動パターンを中心に—		
研究指導教員	教授 庄子 和夫		
論文審査委員	主査 鈴木 はる江	副査 島田 涼子	副査 富田 浩 副査 鍵谷 方子

## 博士学位論文内容の要旨

### 【目的】

慢性腰痛患者の立位体幹前屈時の腰背部筋電図の特徴を見出し、痛みの程度、QOL、心理社会的要因との関連性を明らかにすることを目的とした。

### 【方法】

研究は 2 段階で行った。後向き研究では、当該施設の慢性腰痛患者 813 名の痛みの程度、腰痛特異的 QOL 尺度得点、心理社会的要因の関与度、立位体幹前屈時の腰背部筋電図のカルテ情報を調査した。また腰痛なし者 38 名の筋電図検査を行った。前向き研究では、選定基準を満たし研究に同意の得られた慢性腰痛患者 167 名を対象に後向き研究の結果を確認するとともに、安静立位時筋電図と恐怖回避思考・行動の評価を行った。さらに一部の患者には鍼治療とセルフケアを促す患者教育からなる治療介入を 3 か月行い、各指標の改善度を検討した。

### 【結果】

慢性腰痛患者の立位体幹前屈時の腰背部筋電図は腰痛なし者と異なる特徴を示した。患者を屈曲弛緩比率(flexion-relaxation ratio; FRR)により 4 群に分類すると、各群は特徴的所見を示した。グループ I (FRR<1) は痛みの程度は高いが、心理社会的要因、恐怖回避思考は低く QOL も良好、グループ II (1≤FRR<2) は痛みの程度、心理社会的要因、恐怖回避思考は全て低く QOL も良好、グループ III (2≤FRR<5) は痛みの程度、恐怖回避思考は高く QOL も不良だが、心理社会的要因は低かった。グループ IV (5≤FRR) は痛みの程度は低い、心理社会的要因、恐怖回避思考が高く QOL も不良であった。グループ IV の 32 名に治療介入を行った結果、痛みの程度に改善が認められた 10 名では心理社会的要因と恐怖回避思考の低下、QOL の改善が見られ、筋活動パターンも変化する傾向を認めた。

### 【考察】

FRR に基づき慢性腰痛患者を分類でき、しかも痛み、QOL、心理社会的要因と関連することが明らかとなった。特に心理社会的要因の関与度が高いグループ IV は、痛みの程度が低いにも関わらず QOL は不良であることから心理的ストレスが高い群と考えられた。心理社会的要因の関与度の高い患者には、活動性の向上を目指す認知行動的アプローチや体操、鍼治療の併用が症状改善に寄与する可能性が示唆された。

### 【結論】

慢性腰痛患者の立位体幹前屈時の腰背部筋電図の活動パターンにより患者を 4 群に分類でき、その分類は患者の痛みの程度、QOL、心理社会的要因とも関連することが明らかとなった。

倫理審査申請承認機関：人間総合科学大学 (第 227 号) 東京大学大学院医学系研究科 (承認番号 3029-(1)号)

## 博士学位論文審査結果の要旨

平成 28 年 3 月 11 日、論文審査委員全員が会する場で本論文に関する口頭試問を実施し、申請者に論文内容の発表ならびに関連事項の質問に対する応答を求めた。発表では、腰背部筋電図活動パターンにより慢性腰痛患者を 4 群に分類し、痛みや QOL、心理社会的要因との関連性を見出したこと、心理社会的要因の高い群への治療介入の成績と考え合わせ、筋電図分析は慢性腰痛患者の評価や治療法の選択に寄与できる可能性を述べた。その結果、論文審査委員は本研究が心身健康科学の分野に貢献し独創性のある内容であることを認め、申請者が博士 (心身健康科学) の学位を受けるに十分な資格を有するとして審査の結果を合格と判定した。あわせて、口頭試問では本論文に関する専門知識を問う質問についての的確な応答が得られたことから、申請者は今後自立して研究を行うことができると判断した。

